

2-3 水辺とまちの一体的整備の事例

水辺とまちとの一体的整備の事例（紫川）

■マイタウン・マイリバー整備事業

災害を防ぐ川づくりと街づくりを同時に行なわれています。



紫川位置図

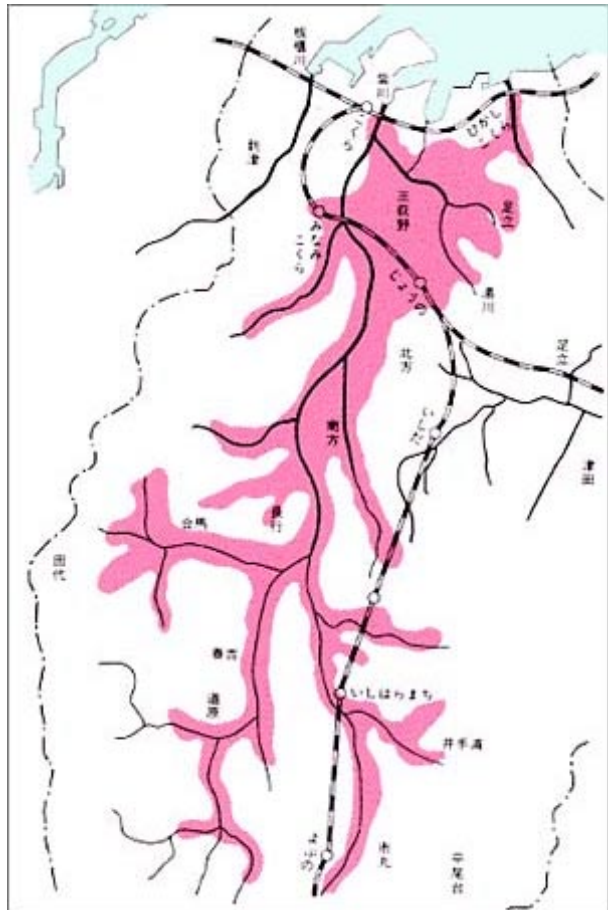
内 容

- 洪水が起きないようにする事業です
下流部を中心に川幅を広げ、川底を掘り下げて、100年に一度の大雨が降っても洪水が起きないように安全な川にするために、事業を進めています。
- 北九州市の顔づくりをする事業です
紫川は、北九州市の都心部を流れるシンボリックな川です。川とその周辺を整備することにより、200万都市圏にふさわしい北九州市の顔づくりを進めています。
- いろいろな事業を共に進めている事業です
紫川を整備するだけでなく、周辺の公園や道路や市街地なども総合的に整備を進めていくことによって、バランスのとれた総合的なまちづくりを進めています。
- 民間と行政が力を合わせて進めている事業です
河川の整備が進むとともに、まわりの建物も、川を意識した川の風景を生かしたものに変わってきています。民間と行政が協力しながら、川に開かれたまちづくりを進めています。

水辺とまちとの一体的整備の事例 (紫川)

昭和28年6月28日、当時の北九州五市(現在の北九州市)一帯は、大集中豪雨に見舞われました。その結果、死者・行方不明者183人、家屋倒半壊3800戸、総罹災戸数8万3000戸、総被害額110億円(現在の額で約600億円)に達するという未曾有の大惨事となりました。

■浸水地域エリア図



大門交差点付近



玉屋百貨店付近



整備前の紫川下流部
(赤い部分は、改修前の
川幅の狭い箇所)

紫川は、北九州市の都心・小倉の中心部を南北に流れ、本市のシンボリックな河川ですが、治水の面から見た場合、大きな問題を抱えている川でした。河口部の川幅が上流よりも狭くなっており、洪水の起きやすい構造になっていたわけでした。

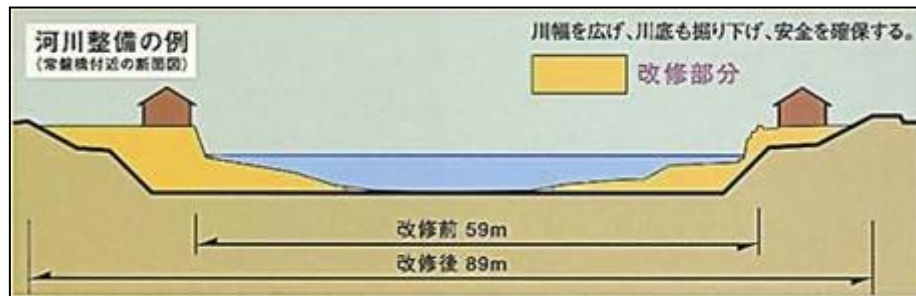
実施箇所:福岡県北九州市

出典:北九州市役所HP

水辺とまちとの一体的整備の事例 (紫川)

■100年に一度の大雨にも耐える川へ(河川整備)

紫川は、河口部が上流よりも狭くなっているため、氾濫が起こりやすい川だといえます。でも、河川周辺の都市開発が進んでいるため、浸水は絶対に避けなければならない災害です。現在は約600トン/秒の水が流出できるように整備され安全度が高められています。さらに以下にあげる3つの整備を行うことによって、970トン/秒の流出が可能になり、昭和28年の災害級の雨(約100mm/時)以上の雨量にも耐えられる川にしていきます。



●洪水予防は「より広く」「より深く」

洪水を防ぐ一番の方法は、川の水を流れやすくすることです。そのためには、川幅を広げ、川の底を掘り下げる必要があります。さらに、橋脚の数を減らせば、洪水の時にも水の流れを妨げることがなくなります。

紫川マイタウン・マイリバー整備事業では、下流の川幅を広げ、掘り下げることによって、洪水が起きないような安全な川づくりを進めています。

●川底の掘り下げ

今後の取り組みとして、川底の掘り下げなどを行い、大きな災害にも耐える河川に整備していきます。



●橋脚の少ない、水の流れやすい橋

橋脚が多いと、ゴミなどがかかりやすいため、洪水の時などは特に水の流れが悪くなります。そこで川の拡幅にともなう橋の架けかえのとき、橋脚をできるだけ少なくするように配慮しています。

水辺とまちとの一体的整備の事例 (紫川)

■主な親水空間・親水施設

紫川マイタウン・マイリバー
整備事業対象区域



洲浜ひろば

江戸時代にあった洲や干潟をイメージした広場です。

紫川は、下流約2kmが潮の満ちてくる区間で、潮の干満によって1.6m前後の潮位の変化があります。その潮の干満をうまく利用することで、浜が出現したり、なくなったりというような、さまざまな変化を楽しむことができます。

水辺では魚やカニを間近に見ることができ、安全に紫川の流りに親しめ、子どもから大人まで楽しめる都会のオアシスとなっています。



河畔プロムナード

潮の干満によって水際の位置が変わり、川とたわむれる人の姿が絶えない河畔プロムナード。

テラスはホテル、護岸は市が整備し、民間と行政が協力して整備したユニークな例となっています。

実施箇所: 福岡県北九州市

出典: 北九州市HP

2-4 多自然型川づくりの事例

多自然型川づくりの事例

(引地川)



■概要

神奈川県大和市は東京都に接する人口20万人の中核都市で、都心に近いこともあって人口の増加が続き、市域の自然的空間は減少しています。

引地川は、その源を大和市の「泉の森」内に水源を発し、相模湾に注ぐ流路延長約17kmの二級河川です。流域は、約90%が平地で残りが丘陵及び山地となっています。平地が多いことと東京、横浜に近いこともあって、昭和30年代以後産業と交通網の発達とともに、流域の開発と人口の集中が進んできました。

しかし、これらの開発に伴い、流域に降った雨は短時間に集中して河川に流れ込み、洪水による被害をたびたびひきおこしています。そこで、県内最重点河川の一つとして、河道の改修、遊水地の整備などの治水施設の整備が進められています。

施工箇所：神奈川県大和市

出典：神奈川県HP、河川環境の保全と復元、日本地図帳

多自然型川づくりの事例

(引地川)



施工後2年半の状態

施工前



引地川の再改修の考え方は

“河川が本来有している生物の良好な生息・生育環境に配慮”

“周辺の良いふるさとと景観との調和”

“市民が自然豊かな水辺空間に親しめる”

ことを基本としており、公園敷地内を流れる接続ブロックで施工された河川を公園と一体となって緑と水の空間を形成するよう再改修されています。

多自然型川づくりの事例

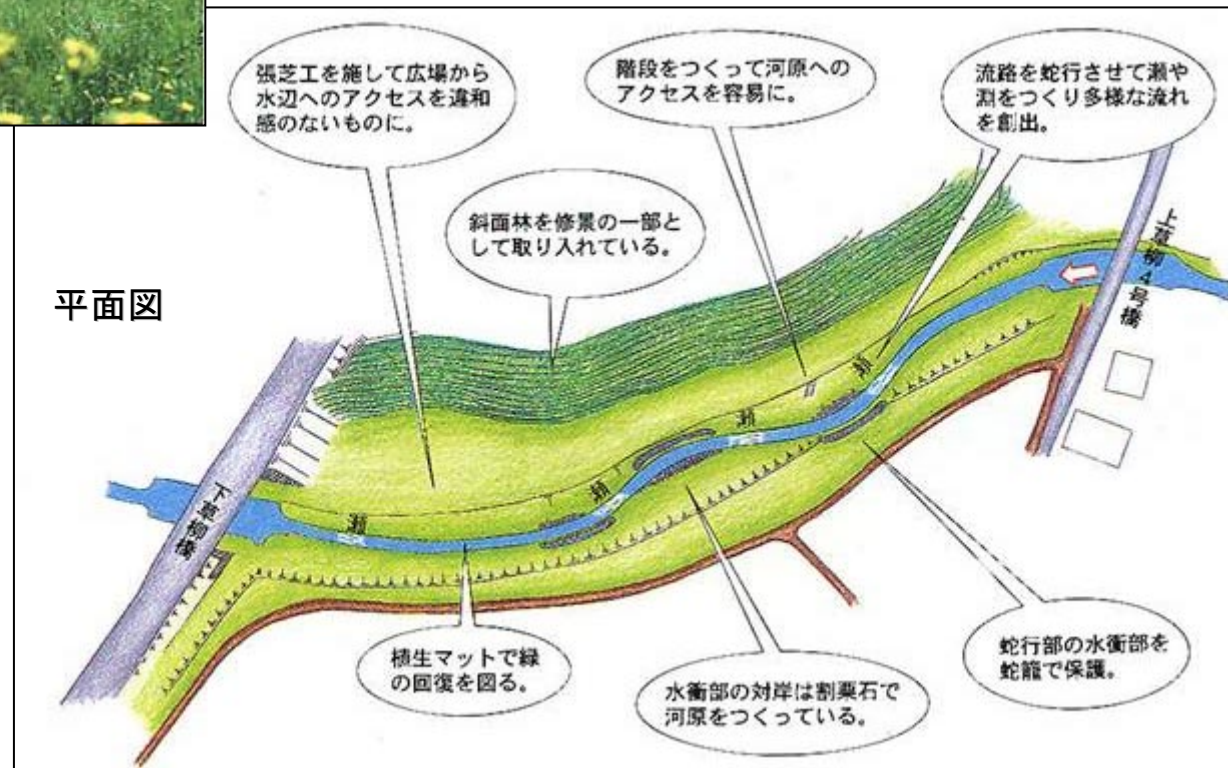
(引地川)



施工後1年5ヶ月

川の中に入って水遊びをする子供たちや桜の木の周りで花見をする人の姿が多く見られるようになり、ふるさとの小川として、水辺のある公園として多くの人に親しまれています。

平面図



施工箇所: 神奈川県大和市

出典: 多自然型川づくりの取り組みとポイント